
召喚師冒険記

イヌツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚師冒険記

【Nコード】

N7046U

【作者名】

イヌツカ

【あらすじ】

普通の高校生：和泉沢 いずみさわ 武人 たけとは、いつもの下校途中、何の因果か事故に巻き込まれ、拳句のはてに、赤ん坊になっていた！？
しかも、ここ日本じゃないよ！？
いや、マジでなんですとおおおおおー！！

笑いあり、涙あり、熱血あり（予定）の、異世界での生活が、今、開く・・・と思う？

一回目 眠りともまじりかへ(前書き)

暇つぶしになれば幸いです。

一回目 眠りともどどいっかへ

・・・・・・・・・・・・・・・・う~~~~ん・・・・・・・・

眠っていた意識がハッキリとしてくる。

でも、まだ眠い。まだ寝てようかなあ・・・・・・・・。

あ、じゃあ、寝てる間に自己紹介をば。

俺の名前は、和泉沢いずみさわ 武人たけと高校2年生。まだピッチピチのヤング
イーン！

普通のサラリーマンの父親と普通な専業主婦の母親との間に生まれ
た、これまた普通の高校生。

少し意外なことをいえば、近所の道場に通っているってと。

うん、だいたいこんな感じかな。

じゃあ、おやすみなさいのスケ・・・・・・・・。

・・・・て、思い出した！

そういえば、帰り道に車にはねられたような気が・・・・・・・・。

でもまあ、こうして寝てるってことは、生きてたってことだ。

じゃあ、今度こそオヤスミ・・・・・・・・「ぐおっ!?!」・・・・・・・・

・・・・なんか、変なおっさんの声が聞こえた。

なんか、「なぜ、こんなところに!?!」とか「どうすれば!?!」と

か「いつそ・・・・・・・・」とか

けっこう、うるさい。

でも、眠いからあとにしと。

起きたらなんとかなるよ・・・・・・・・。

・・・・・・・・ぐうーぐうー・・・・・・・・。

このとき、もう少ししっかり起きてれば、俺はあとで混乱せずに済んだのだが、それは起きてからのお話。

一回目 眠りともなごころかへ（後書き）

かなりノリで書いていますので、更新は遅いかもしれません。

「二回目 起きたら」おぎゃあ (前書き)

基本、主人公は怠けものです。

声の主が、俺の視界に入る。

「ここまで瞳の色が黒いのは初めて見るな。いや、それにしても珍しい」

俺を真上から覗き込んでいるその声の主は、見た目30代半ばくらい、メガネをかけたインテリ風の男だった。

「おぎゃおぎゃあ（あんだ、誰だ）？」

「よしよし、やっと目が覚めたみたいだし、こいつの名前も決めないとな」

インテリ男はそう言うと、腕組みをしながら、うんうんと唸りだした。なんか、だんだん頭が傾いている気が……。

俺はというとインテリ男が名前を考えている間、「おぎゃあ」「おぎゃ」と叫びまくっていた。

内容的には「なんだこれ!」「説明キボンヌ!」「あんだカツコイイよ!」などなど。

もうやけくそ気味だね、俺。

そんなやけくそな叫びに疲れていると、

「よし!」

インテリ男がなにか閃いたようで、ポンと手を叩きながら頷き、

「決まったぞ、お前の名前」

よっぽど良い名前が思いついたのか、満足げな顔で一人納得している。

ていうか、納得しなくていいから、俺のこの状況を誰か説明しろ
おおおー！！

二回目 起きたら「おぎゃあ」(後書き)

進行速度がやたら遅いです。

全然話が進んでいない気が・・・。

次回、主人公の異世界での名前が決まります！

三回 目 名前と父親と（前書から）

あつとつと語めてです。

三回目 名前と父親と

やあ、みなさん。こんにちは。和泉沢 いずみさわ 武人 たけとです。

あれから早いもので2年と半年が過ぎました。

え、いきなりすつ飛びすぎじゃないかって？ その間、なにштоつたんや、て？

まあ、色々とあつたんですよ。ええ、色々、ね。．．．

そんな言えませんよ。いきなり赤ん坊になつてたのはさておき（いや、おくとこではないけど）、見知らぬ中年野郎（いや、言葉が過ぎました）に、あつかんべえされたり、いないないばあされたり。

しまいには、あの、屈辱的な（うう思い出すだけでも涙が出る）おしめ交換とかされたり。．．．

もう、わたくしおヨメにいけません！！

．．．．．とまあ、そんなこんなで、いきなき赤ん坊になつてたショックと、中年野郎（あ、また言った）から受けた精神的屈辱から、立ち直るのにかなりの時間を費やしたわけです。

で、立ち直つてから改めて自分の状況を再確認したのですよ。

- 1、自分、赤ん坊に逆戻り。
- 2、自分、拾われたらしい。
- 3、自分、中年野郎（一応、育ての親）と二人暮らし。
- 4、ここどこ？
- 5、ここ日本ジャナイヨ。ていうか、ニホンテドコデスカ？ソレ、オイシインデスカ？

ということが判明。で、今現在、やっとこさ2歳と半年になった俺がいる。

そして……………

「おい、ライハ！ちょっと手伝ってくれや」

「分かった！今、行くよ！」

そう、名前が変わりました！ついでに父親も！一石二鳥！

とりあえず、呼ばれたので行ってみる。

声のした方　台所に行ってみると、俺を拾って育ててくれた男、
バイアス・バーミアスがなにか作っていた。

「なにかよう？」

なんの用事かは分かり切っていたが、一応尋ねてみる。

「ワリいな。昼飯の準備をしてたんだが……ちくしょうめ、う
まくできねえ」

……いや、作ること自体がうまくできないって……。

「というわけで、おめえ、作ってくれねえかい？」

「こっちに丸投げかよっ！？」

一応、俺これでも2歳なんですけど……………。

まあ、そんなこと言っても、どうせ作らされるんだろうけどね。
俺って、働きの者！

「いいじゃねえか。どうせおめえが作ったほづがつめえんだから
よっ。」

いや、胸張って堂々と言っなよ！

俺はため息をつくと、服を腕まくりし、

「とりあえず、簡単なもので良いなら作るから」

「いつも、わりいな」

まったく、この中年野郎は……。

「ただし！」

台所を出ようとしたバイアスを引き留める。

「重い物とかは持てないんだから手伝ってよ。俺、これでも2歳
なんだから！」

バイアスは、その自慢のきれいな灰色の髪をガシガシとかきなが
ら、

「まったく、人使いの荒い息子だ……」

「おまえだろ!?!」

やれやれといった風に首をふるバイアスに、思わずツツコミを入
れる。

その後、二人でぎゃあぎゃあと言い争いをする。

これが、赤ん坊の俺を拾ってくれた男　バイアス・バーミアス
と俺　和泉沢　武人もとい、ライハ・バーミアスの、いつもと変
わらない毎日だった。

三回目 名前と父親と（後書き）

父親出てきました！

四回目 世界のこと(前書き)

今回は簡単な説明です。

四回目 世界のこと

逃げようとするバイアスを捕獲し、強制的に手伝わせながら、俺は今までこの育ての親から聞いた話を思い出していた。

「どうやらここは日本ではないらしい。いや、地球ですらないっぽい。というのはバイアスの部屋に飾ってある世界地図をみて、なんとなくわかった。」

「だって、地図に一つの大陸しか描かれていないとか、ありえないじゃない？ 日本ってどこよ的な？」

「まだ文字が読めなかった俺は、バイアスに地図に書かれている文字を読んでもらい、あとついでに説明もしてもらった。」

ガラバトラ大陸。

それが、俺が赤ん坊としていつの間にかいた世界の名前だった。

ガラバトラ大陸は一つの大陸で、そこに4つほどの国が存在している。

一つは、様々な種族が住む、「アルハイツ王国」。

二つ目は、エルフヤドワーフ、妖精といった種族が住む、「メルネリア公国」。

三つ目は、竜族や魔族といった種族が住む、「ガルハイネ帝国」。
四つ目は、商人たちが治める、商業・工業の中心、「カインネ独立自治州」。

そして、これらの国々が協力して警戒をしている、魔族たちの巢。通称「魔物領」。

大きく分けて、この4つの国と魔物領から、この大陸はなりたっている。

それぞれの国は、独自の文化や技術を持ちながら、それをお互いに共有し、友好的な関係を保っている。

すごく昔の話だと、それぞれの国が戦争状態で、かなり荒れた時期もあつたらしいが、今ではお互い和平協定を結び、うまくやっているらしい。

まあ、それもこれも、魔物領の魔物たちから、自分たちを守るために協力せざるを得なかったというのもあるらしい。

どうもこの魔物領の魔物たちは、それなりに強いヤツもいるらしく、それがかなりの数でいきなり現れたりするらしい。それも、一国を滅ぼせるくらいの数で。

そうなると、魔物たちに自分たちが駆逐されてしまうと恐れた各国のお偉いさんたちが、戦争なんかせず協力して撃退しよう！となるのは自然な流れなわけで。

そんなこんなで、利害が一致した各国は戦争をやめて仲良くすることに決めた。そして、現在に至る、と。

（国同士が仲が良いのは良かったけど、意外と危険な世界だよなあ、こころって。）

魔物とか絶対に会いたくない生物、NO・1だ。会ったら絶対逃

げよう。平和が一番！

そんなことを心に決めてると、いつの間にかバイアスが料理の手伝いを終えて、出来上がった料理からテーブルに運んでいた。

「せっかくできたんだし、さっさと食べちまおうぜ」

そういうなり、椅子に座り俺をせかす。

俺は、物思いにふけるのをやめ、バイアスの向かい側に座る。もちろん幼児用の椅子だ。

「じゃあ、食べますか」

「おう、待ちくたびれたぜ！」

そうして二人で昼飯を食べたのであった。

四回目 世界のこと（後書き）

主人公が赤ん坊として生まれた世界についての説明でした。

五回目 早起き(前書き)

進みが遅いよね

五回目 早起き

4歳になった。

家の前にある、少し広い庭。

まだ陽が昇り切っていない早朝。辺りには霧が出ていて、少し視界も悪い。

そんな薄暗い中、俺はゆっくりと準備体操を行っていた。

なぜこんな早朝に起きて準備体操なんかをしているかというところ、稽古をするためだ。

俺が赤ん坊として生まれる以前の世界　日本で日課のようにしていた柔術の稽古だ。

もちろん稽古といっても、無茶な筋力トレーニングなんかをするわけじゃない。

まだ未発達な4歳の身体でそんなことをすれば、骨格に歪みが生じるかもしれないし、なにかしらのムリが出てくるかもしれない。

それは今は良いかもしれないが、後々成長するにあたって無視できないほどの後遺症になる可能性もある。そんなリスクを負ってまで筋力をつける必要はない。もちろん今現在は、だけど。

一つ一つ、丹念に準備体操とストレッチを行っていく。

なぜいま？　と言われれば、4歳になったから！、と答えておくが、それだけではない。

バイアスいわく、この世界は常に危険と隣り合わせらしい。なんせ『魔物領』なんてあるのだから。

それなりに安全は保障されているらしいが、いかんせん、魔物との遭遇は日常茶飯事！ということらしい。

そういつたこともあり、4歳となったのをきっかけに稽古をしようと思つたわけだ。

「……………」

準備体操を終え、最後に軽くジャンプをし、目を閉じる。

(できれば、魔物とは遭いたくないなあ……)

そんな後ろ向きまっしぐらな考えも、徐々になくなっていく。

ゆっくりと腰を落とし、構える。

「……………」

今から行つのは、型の稽古だ。俺が習っていた古流柔術の型。

「……………はっ！」

気合を発するとともに、基本の構えをする。右足を少しひいて半身になり、右手は右目の横に、左手は、左の腰の位置にそえる。と同時に両の手は『拳』をつくる。

古流柔術、基本の構え。

『天地陰陽の型』

そのまま、両の『拳』を振り、流れるように型を行っていく。

以前、道場に通っていた時、古株の門人からある話を聞いたことがあった。

いわく、流派の先人たちは、小さいころから型や試合を行い、型を身体に覚えさせ、その技術一つ一つを、己の一部としたという。身体に染み込んだ『技』は、あるときはその身を守り、またあるときは必殺の技として相手を葬った。そうして、昔の先人はいついかなる時でも、『技』が出せるように、自分の身体に『型』を仕込んだのだ、と。

ならば、いまこのときから、稽古を行えば、いつか俺も『技』を身体に染み込ませることができるようではないだろうか？

もちろんそのためには日々のたゆまぬ研鑽が必要だ。

しかし、その研鑽は俺を裏切らないだろう。それにぶつちやけ、魔物に襲われて、はい死にました！なんて、かなりいやだ。

そんな考えも型を行っていくうちにどこかへ消えていく。

無心に型を行う。

「…………ふっ！」

最後の動作を終え、呼吸を整える。

生きるための稽古。生き延びるための稽古。

……………でも、できれば遭遇したくないなあ。むしろ寝ていたい。

そんなことを思いながら、1日目の早朝稽古を終えたのだった。

五回目 早起き(後書き)

うん、遅くてごめんなさい

六回目 『魔術』と少しの兆し(前書き)

少し進みます。

六回目 『魔術』と少しの兆し

5歳の冬。それは起きた。

冬の季節。

俺はこの時期の日課となっていた薪割りをしていた。

俺とバイアスが住む家は、アルハイツ王国の外れ、辺境と言つていいほど国の外れも外れにあり、メルネリア公国の方が近いくらいに建っていた。

バイアスいわく、「国境の一步手前、最西端の家」らしい。

そのためか、この家は他の王国の村や町より雪が多いらしい。

もともとメルネリア公国は山が多い国で、雪も他の国に比べると段違いに多いらしい。それでも、公国の人々は、『魔術』を使用しているためか、この雪に苦勞せず、むしろ快適に暮らしているのとだ。

毎年、この冬の季節の雪に悩まされる俺とバイアスにとっては、羨ましいくらいの話だ。いや、いっそ妬ましい。

(・・・っーか雪多すぎ！)

一時、手を休めて辺りを見回す。

そこには、辺り一面白銀の世界に覆われた光景が広がっていた。いや、むしろこれは・・・

「軽い雪山だろ・・・」

自然とため息が出る。

毎年のことではあるが、この光景を見ると軽く頭が痛くなる。も

ちろんその不便さを考えるとではあるが・・・。

家から少し離れたこの薪割り場から見えるものは、「雪」のみ。比喻表現ではない。ええ、断じて比喻表現じゃない！

家は雪に覆われ・・・むしろ雪に「埋もれ」ていた。かろうじて、家のドアのところだけ雪がどかさされている。そのさまは、前の世界で見た「かまくら」に近い。

そこから、家の庭 薪割り場や倉庫などに道が掘られている。モーセが海を割ったときのように、雪が縦に割れているのだ。

これは、雪が積もってから、バイアスと二人で懸命に掘った「道」だ。毎年のことではあるが、正直気が滅入る。

それでもまだマシなのは、この道がすべて「自力」ではないことだ。

いくらなんでも、毎年自力でこれを掘るとなると、正直、この時期屍が2つできてもおかしくない。

では、どうやったのか？

それは、バイアスの「魔術」によるところが大きい。

『魔術』

それは、この世界に当たり前のようにある「術」。

昔はエルフや妖精といった種族しか使用できなかったらしい。それを人種族が見よう見真似で、自分たちでも使用できるレベルに下げて開発してから、一気にその使用率は広まった。

もともと、「魔術」とは、この世界に住まう「精霊」から、あくまでも「力」を引き出して使用していたものらしい。もちろん強力な魔術師はいたが、それは「精霊」に「気に入られた」人であって、「力」を借りていただけに過ぎない。

そんな魔術を人種族がパクリよろしく模倣し、出力を下げ、使いやすいようにしたのが、今現在この世界で最も多く使われている「魔術」だ。

だから、人種族が使う魔術なんてたかがしれている。そのはずなんだが……

(バイアスのは、普通、ではないよなあ……)

初めてバイアスの魔術を見たときは、すごく驚いた。なんせ、小説やおとぎ話の中でしかあり得ないことだ。それが目の前で、さも平然と行われたのだから、驚かずにはいられない。

それに、いつも思うのだが、バイアスの魔術は、人種族の行うものにしては出力が大きすぎる気がする。比較対象がないので、あくまで俺の予想ではあるのだが……でも、あながち間違っていないと思う。

(なんせ、この雪の道、ほとんどバイアスの魔術で掘ったからなあ……)

バイアスが手がざしたかと思うと、訳の分からない幾何学模様をした魔法陣が突然手のひらの前に現れ、次の瞬間、火炎放射機顔負けの火を出したのだから、これのどこが「使いやすいように出力を落とした」ものなのか、問いただいたいくらいだ。

でも、と思う。あんな便利なものがあるのだから、一度は使ってみたい。いや、むしろ使いたい。

今まで、ファンタジーな世界でしかありえなかった技術が、目の前にあるのだ。その興奮といたら、すこし子どもの域を外していたほどだ(いや、まだ立派な5歳児だけだ)。

もちろん、すぐに教えてくれるように頼んだ。それはもう、目をウルウルさせて上目づかいをして、子どもの武器を最大限に活用して迫った。

その、お願い、にバイアスはかなりの間自分の何かと葛藤してい

たが、結局、

「まだガキには早い」

という、にべにもない一言（かなり悶絶しながらではあったが）。

それ以来、魔術に関してバイアスは一貫して、ライハにはなににも教えていない。

さきほどの魔術の歴史などについては、ある程度ライハの魔術に対する情熱を少しでも削ぐためか教えてくれた。それでもほんの少っただけだ。こと技術的なものに関してはまったく教えてくれなかった。

「早く教えてくれないかあ」

そんな淡い期待を想いを馳せながら、薪割りを再開する。

・・・カンッ！

あたりに薪が割れる音が木霊する。

どのくらいしただろうか、ライハはふと自分以外の気配を感じて、薪を割る手を止めた。

早朝稽古をするようになってから、気配に対してかなり察知することができるようになっていた。

辺りを見渡す。

誰もいない。

あるのは自分と、白銀の世界だけ。

「……………」

心を落ち着け、気を静める。
そして、辺りの気配をもう一度、探る。

『…………あ』

今度は、分かった。

小さくだが、声も聞こえた。

自分のすぐ近く、左後方。

ゆっくりとそちらに目を向ける。

そこには…………、

『聞こえるかあ？』

身体を燃やしながらこちらを見る、小さく、燃える小鳥がいた。

六回目 『魔術』と少しの兆し（後書き）

ここから物語が少しずつ進みます。
主人公の能力も少しずつ明かされていきます。

七回目 炎の鳥（前書き）

ついに出版した、鳥。

表記に間違いがありましたので、直しました。
北方炎帝 南方炎帝

七回目 炎の鳥

『おーい、聞こえてますかあ？』

その『鳥』は、こちらに向かって右の手（羽）をひらひらと振った。

俺はというと、いきなり目の前に燃える鳥が現れて驚いて、思考が止まっていた。

なんせ、身体自体が燃えている鳥である。まだ、ただ赤いだけの鳥とか、話すだけの鳥とかなら、ここまで驚かなかっただろう。

さらに言えば、その現れ方だ。

大概の生き物は、まず気配を出す。それは呼吸とか、風に流れてくる臭いとか、それ自体の意思みたいなものなど様々だ。

でも、こいつにはなにもそれら全てがなかった。察知できたのは、本当にかすかな声だけ。いくら無防備だったとはいえ、それなりに気配を探れるようになった俺にとって、こいつは明らかに異常としか言えない。

（そもそも、生き物なのかどう・・・）

『・・・うわーん、聞こえてないよお〜』

・・・突然、泣き出した。

燃える鳥は、盛大に泣き出した。それも凄い音量で。目の前で泣かれるこちらとしては、正直たまらない。つーか、すごいうるさい。

『うわーーーん！！！』

だんだん大きくなってくる泣き声に、考えていたこはどこかへ吹き飛び、徐々にイライラしてくる。

その泣き声に我慢ができなくなってきた・・・

『うわーーーーーん!!!!!!!!!!』

ベチッ!!

思わず、手が出て、頭を叩いてしまった。

『…………!!』

叩かれた鳥（もう鳥としか言ってやらない!）は、驚いたのか、泣くのをやめて、こちらを見ていた。器用にその両手（羽?）で頭を押さえながら。

『…………』

『…………』

『…………』

「…………ごめん。あんまりうるさいから、思わず手が出た」

『…………!!?』

沈黙に耐えかねて、一応謝る俺。

（いや、確かにうるさかったけど、これって動物虐待と取られても仕方ない訳で）。

（でも、むこうにも非はあるわけで）。

（ていうか、そもそもこいつ動物か?）

そんな風に俺が心の中で葛藤していると、顔に衝撃が走った。

ピタンツという盛大な音とともに。

『主さまあ~~~~!!!』

「.....!!!」

いきなりのご主人さま扱いに驚く。というか顔が痛い。しかも、なぜ顔面に抱きつく.....。

『主さま主さま主さま主さまああああ!!!』

抱きつきながら、これでもかと言わんばかりに、両手(羽?)をバタつかせる鳥。

いや、なんか.....こう.....

「.....わざわざいわ、ボケえ!!!」

『うきゃ!?!』

シユバつと鳥を掴んで顔から引きはがし、勢い良く、これまた全力投球!!!

『きゅわ~~~~~.....』

鳥の意味不明な悲鳴が辺りに木霊し、鳥の姿が彼方に見えなくなつた。

見えなくなつたのを確認した俺は、フッと不敵に笑い、

「俺の平穩は守られた.....」

決まつた。カッコいいぞ、俺!

『・・・ひどいです、主さまあ』
「なぬっ!?!」

遙か彼方に投げ飛ばしたと思ったら、いきなり目の前に現れた鳥。
なんだこの鳥。というか、何者だ? この鳥。

『せっかく主さまに声が聞こえて嬉しかったのに、急に投げられるなんて・・・ヒドイですう、あんまりですう』

わたし、悲しいです。と言わんばかりに、目をぐるぐるさせて、俺を見つめてくる鳥。

「・・・いや、あんまりにも、その、わず・・・と、暑苦しかったから・・・」

そんな鳥の態度に、思わず今までの怒りが冷めていき、言い訳をする。途中、わずらわしいと言いそうになったのはご愛嬌だ。

『いいんです、いいんです。どうせボクなんて、もともと体が燃えてて、暑苦しいんですから・・・』

うわ、拗ねちゃったよ。メンドクさい・・・もとい、面倒だ。

「でもほら! 体が燃えてるなんてカッコいいじゃん!」
『・・・カッコいいですか?』

「うんうん! カッコいいと思うなあ、俺は!」

『・・・そっかあ。カッコいいんだあ』

「そうそう、カッコいいよ」

『えへ、照れちゃうなあ』

俺のこれでもかと言わんばかりの褒め言葉に、段々と機嫌を良くしていく鳥。

『えへへへえ〜』

だらーんと顔がニヤケた鳥に、

(そろそろいいかな?)

とりあえず、気になっていたことを聞いた。

「それで、そのカツコイイ鳥である君は、一体、なんなのかな？」

俺の問いに、鳥はまだ顔をニヤけさせながら答えた。

『ボクは炎帝です』

「・・・は？」

俺の訝しげな声に気がついたのか、鳥はニヤけていた顔を引き締め、真剣な顔でもう一度言った。

『四方が一柱、南方炎帝。主が現れしとの報に、馳せ参じつかまつりました』

今までの、ふやけて気の抜けた話し方と一変して、厳かに確かな威厳を持ってそこに存在していた。

『我、南方炎帝。主との契約をなし、その力とならん』

瞬間、鳥を包んでいた炎が爆発的に燃え上がる。

あまりの炎の勢いに目をつむった俺が、次に見たものは、

「!?!」

辺りの雪を瞬時に溶かすほどの、凄まじい炎を身に纏った、巨大な、神なる鳥であった。

七回目 炎の鳥（後書き）

そろそろ、バイアス父さんの出番がほしいなあ

七・五回目 『答え』は目の前に(前書き)

バイアス父さん視点、しかも主役です。

七・五回目 『答え』は目の前に

その日、バイアス・バーミヤスは自分の書斎で、長年取り組んでいた研究に打ち込んでいた。

といつても、今まで実践してきた理論や技術を、論文として纏めているだけなのだ。

カリカリと文字を書く音だけが室内に響く。

今まで行ってきたことを纏めていなかったのもあって、その量はかなりのものになっていた。現に、ここ一週間ほどはこの作業しかしていない。

「・・・ふう」

書いていた手を休め、首を左右に曲げる。

ゴキツと景気の良い音がなり、凝り固まった首の筋肉をほぐす。

「・・・あいつにも手伝わってもらいてえなあ」

あいつとは、もちろんライハのことだ。自分が拾い、育てた子ども。

今では、息子と言っても良いほど大事に愛情をそそいでいる子ども。

だが、とバイアスは思う。

この作業だけは、ライハには手伝わせることはできない。いや、見せることすらできない。

今自分が取り組んでいる『研究』は、この世界においては異端も異端。さらに言えば、実現すら可能なのか分からない。むしろ不可

能の可能性の方が高い。

それに、この『研究』は、あくまでも自分が始めたものだ。自分のエゴに子どもを ライハを付き合わせて良いものではない。

「・・・まあ、あいつはやらねえだろうしな」

がしがしとその灰色の髪をかく。

自分にしたって、こういった机仕事は苦手だ。それは、昔働いていたときから変わらない。

「・・・続きやんねえとな・・・」

そういつて、休めていた手を再開させる。

できれば、今日中に全部纏めてしまいたかった。

「・・・・・・・・・・」

カリカリと文字を書く音だけが部屋に響く。

書くことだけに集中し、一心不乱に文字を紡いでいく。

「・・・・・・・・・・ん？」

不意に書く手を止める。

書くことに集中していた為、ハッキリとは分からなかったが、

「・・・魔力？」

ほんの微かではあるが、感じたのだ。魔力を。

『魔力』とは、『魔術』を使用するにあたって放出される『力』

のことだ。

人間であれ、エルフであれ、魔族であれ、誰もが持っている『力』だ。ただ、使えるかどうかは使用する者の適正にもよるが。

その魔力を感じた。

だが、一体誰の魔力なのだ？

この家で、『魔術』を使えるのはバイアスだけだ。ライハは使えるかどうかは分からないが、今はまだ『魔術』を使えない。

では、誰が魔力を放出したのだ？

疑問は尽きない。

気がつけば、すっかり文字を書く手は止まっていた。

バイアスは、目を瞑り、魔力が放たれたであろう『原因』を探るためと思考を絞る。

「・・・・・・・・」

閉じていた目をあける。

魔力は家の外から感じられた。

だが、気配がおかしい。

魔力のそれが、人間のそれではない。

「・・・・エルフじゃねえし、魔族か？」

しかし、それらの種族の魔力にも似ていない。
いや、魔力ですら違つと言える

むしろこれは、

「……『精霊』にちけえな……」

そう、自分たちが魔術を使用するとき、『力』を引き出す、『精霊』の気配に近い。

ガシガシと頭をかき、立ち上がる。

「……考えても分からねえし、確認するしかねえか」

書斎を出て、外へ向かう。

そのとき、

「……なっ!?!」

気配を感じながら歩いていたバイアスは驚愕した。

先ほどの気配が、それまでのモノより、はるかに強大に膨れ上がったのだ。

「……こいつはやべえ……!」

そこで思い出す。

確か、この時間。自分の育てた息子は、外で薪割りをしている時間ではなかったか。

「ライハ!!」

息子の名を叫び、外へと急ぐ。

廊下を走り、外へと通じるドアを、

「めんどくせえ!！」

ドンっ!!! という音とともにドアを『魔術』で吹き飛ばす。

そして、

「ライハ、大丈夫か!？」

そこで見たものは、バイアスの想像を超えたモノであり、

「・・・なっ!？」

求めていた、『答え』であった。

七・五回目 『答え』は目の前に（後書き）

うん、進み遅っ！

八回目 コントと『契約』と『代償』と(前書き)

契約執行

八回目 コントと『契約』と『代償』と

燃える。

紅く、燃える。

俺は、今、自分が目になっている光景が信じられなかった。

ゴウツッー！

それは、あまりにも猛々しく、

ゴウゴウツッー！

紅く、美しい『炎』だった。

『主よ』

敵かに、しかし、確かな力強さとともに、『炎』のヌシは語りかけてくる。

『我と、契約を』

契約。

そう、契約を求められている。

俺が、

この『炎』の『鳥』に。

「……………なぜ……………」

いまだ、目の前の光景を処理しきれていない、俺の精一杯の問い。

『……………なぜ、と……………我に問うか、主よ』

『鳥』は、その首を曲げ、頭をこちらに下げる。

そこで俺は、この『炎の鳥』が自分よりも何倍も大きいことに気付く。

体が大きいため、頭を下げて、俺を見下ろす格好になっている。

『鳥』の眼差しが、俺を見つめる。

『それは、主が我の声を聞き、気配を感じ、姿を見ることができ
るからだ』

「それは……………」

それは、どうということだろうか。

普通にできることではないのだろうか。

現に、目の前の『鳥』は、圧倒的な存在感を持って俺の前にいる。

『否』

その返答にビクツと体が反応する。

『私の姿、声、気配は、主にしか分からない』

「……俺にしか……？」

『是^せ』

俺の問いを肯定する。

だが、腑に落ちない。俺にしてみれば当たり前のことだ。当たり前前に聞こえ、感じ、見ることができる。

しかし、もしこの『炎の鳥』の言うことが本当だとすれば、それは……、

「ライハ、大丈夫か!？」

この育ての親には、見えないのだろうか。

「……なっ!？」

聞こえないのだろうか。

『……ほお……』

感じないのだろうか。

「……こいつあ一体……」

『……我を認識するか、人間』

「……なんとか、な……」

『さすがは、主の『親』か』

「お褒めに預かり、光栄だねえ、精霊さんよお」

『・・・人間にしては、だが』

「つねねえこつて」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・て、

「普通に会話してるじゃんか!？」

『む?』

「お?」

俺の突っ込みに、こちらを見る一人と一羽。

「俺の驚きを返せっ!!」

あの、驚きのあまり、声も出せず、馬鹿みたいに突っ立っていた俺がアホみたいじゃないか!

『主は、驚きすぎだ』

「そつだぜ。おめえは驚きすぎだ」

一人と一羽は、そろつて俺に突っ込みを返す。

「驚くだろ、普通!？」

『そうなのか、人間?』

「いや、驚かねえと思うぜ。精霊」

そして、そろって首をかしげる。

「俺にしか見れないんじゃないのかよ!？」

『この『人間』は特別だ、主よ』

「そつそつ、おらぁ特別よぉ」

『炎の鳥』の言葉に、へらへらと笑いながら相槌を打つ、育ての親。

『して、主よ。返答や、いかに?』

へらへら笑う親父を一瞥し、こちらに返事を要求する『鳥』。

「ん? なんのことでえ?」

『鳥』の質問に首をかしげる親父。

……正直、馬鹿らしくなってきた。

なんで、こんなに驚いた拳句、親父と訳分からん『燃える鳥』のコントに付き合わなきゃいけないんだ。

「……………契約する!」

少し一人と一羽のコントにイライラしていたのか、最後は怒鳴るように言ってしまった。

『・・・心得た!』

『鳥』は、待つてましたと言わんばかりに声をあげる。

「・・・契約?・・・いや、おい、ちよつと待て!」

俺の言葉になぜか焦るバイアス。

(なんか不味かったか?)

バイアスのその様子に、少し早まったかと考え直す。
だが、そんな俺の考えを余所に、

『我、南方炎帝。主が言葉のもとに契約をせん!!』

『燃える鳥』が契約執行の宣言をし、身に纏う炎が、爆発したように燃え盛る。

そして次の瞬間、

「がつ!?!」

俺の体の中に、猛烈な勢いで炎が入り、

「ぐ・・・ああああああああああああああああああああああああ!!」

体を、内からまたは外から、激しい痛みと身を焼き尽くすような熱が、襲われ

「ライハ!？」

親父が俺を呼ぶ声を最後に、俺は意識を手放した。

八回 目 『コントと』契約』と『代償』と(後書き)

やっとここまでできたよ・・・

九回目（前書き）

遅い、遅い・・・ごめんなさい。

九回目

気がつけば、俺は炎に囲まれていた。

見渡す限り、炎しかない。

ここには、俺と炎しかなかった。

「おいおい、どこだよここは？」

正直、俺は戸惑っていた。

当たり前だ。目を覚ましたら、いつの間にか炎に囲まれていたんだから。

「これぞ正に、火炙り！ なんちゃって！………笑えねえ」

思わず、ぼけ突っ込みをかます俺。

……なんか悲しくなってきた。

(でも、本当になんでこんなところにいるんだ?)

そこで思考を少し前に戻す。

(確か……勢いで『契約する』なんて言って、それから………)

『炎』が、俺の中に入ってきたのを思い出す。

(・・・それで、体の物凄い痛みが走って・・・それこそ焼かれるような・・・!?)

はっ、と俺は思い至る。そして、自分の身体を見やる。

あれだけの痛み、あれだけの熱さ、あれだけの量の炎。

どう考えたって、自分の身体が五体満足であるはずがない。

だがそこには、

「・・・・・・・・・・なんにもない!?!」

そう、なんにもなかったのだ!

炎に焼かれた跡や、火傷、小さな傷に至るまで、俺の身体には何一つついていなかったのだ。

「これって一体・・・・・・・・」

「それは『我が炎』だからだよ、主」

いきなり声をかけられて、俺はハッと声のした方に振り向いた。

そこには、頭くちかをたれる、『炎の鳥』がいた。

「驚かせて済まない。我が主よ」

『鳥』、いつの間にか、俺が振り向いた先に、その巨体を現していた。

「主よ。ここは、主の心のなかの世界。そして、この主を取り囲んでいる『炎』は、全て我が生み出した『炎』。いや、我自身といっても過言ではない。その『炎』が、我が主を傷つける道理はいさ

さかもあるう筈はずがない」

『鳥』は、頭を起こし、俺を見つめながら話を続ける。

「先程の『契約』の際は、私のその膨大な量の『炎』に耐え切れず、主に苦痛を与え、さらには意識を失わせるという失態まで犯す始末。いくら我が主とて、まだ6歳の人の子。その小さな身体で『我が炎』を受け止められる筈がない」

『鳥』は、俺に苦痛を与えてしまったことに気にしているのか、沈痛な面持ちで俺を見やった。

「だが、痛みを感じ、意識を失ったとはいえ、主は『我が炎』を全て受け止めた。全ては無理と思い、数回に分けて行うはずであった『儀式』をたった1回で終わらせてしまった」

俺を見るその瞳には、確かに驚きが見て取れた。

「ゆえに、我は改めて思ったのだ。やはり我が目に狂いはなく、我が主にふさわしい、『主』なのだ、と」

「だからこそ、改めて申し上げる。我、南方炎帝は、いついかなるときも主のそばを離れず、またあらゆるモノからも主を守り、助け、共に生きると」

そういって、俺を見る眼は、とても強い意思の籠った眼差しだった。

「………とりあえず………」

その眼差しに見つめられながら、俺は・・・

「・・・・・・・・現状説明せやああああ!!!!!!」

なぜか関西弁で、しまいには手にハリセンを持ち、

スパアアアン!!

という景気の良い音と共に、『鳥』の頭を叩き、最大級のツッコミを入れていた。

九回目（後書き）

しまいには、精神世界・・・

十回 『その』名は……(前書き)

やっと、名前が……

十回目 その『名』は……

「……ようするにだ。今俺がいるここは、俺の精神世界であつて、現実には俺は意識を失つて、ベットで呑気に寝ているわけのことか……」

『左様だ。我が主よ』

手に持っているハリセンで肩をトントン叩きながら、俺は『火の鳥』に現状を確認していた。

『火の鳥』はというと、器用に片手（羽？）で先ほど俺に叩かれた頭の部分をさすっていた。

まあ、確かに思いっきりツッコみましたけど……。

「じゃあ、そもそもどうやって俺は目を覚ますんだ？」

ビシッとハリセンを『鳥』に向けながら質問する。

ハリセンでまた叩かれるのが嫌なのか、鳥は一瞬ビクッと身を竦ませながら、

『目を覚まそうと思えば覚める。だが、それは私の話が終わってからだ』

簡潔な答えをありがとう。じゃあ、さくさくとメンドイ話とやらを終わらせよう！

『主よ……考えが声に出てるのだが……』

呆れた声で、俺にツッコミを入れる『鳥』。

むう、『鳥』に突っ込まれるとは……不覚！

『まあ良いか。主も望んでいるのだし、早速で悪いのだが話をしよう』

そういうと『鳥』は真剣な眼差しで俺を見つめた。

『先ほども名乗ったが、我は『南方』 すなわち『南』の方角を守護し、『炎』を司っている。この世界に存在する、主が呼ぶところの『精霊』といった者たちのまとめ役の、さらに上の『管理者』といったところだ。我のほかにも三方 『北』、『東』、『西』をそれぞれ守護するものたちがいるのだが……まあ、あやつらのことは後々話すして、実は早急に決めなければいけないことがある』

なるほど、ね。目の前にいる『燃える鳥』は、この世界の魔法の源 『精霊』たちの上司も上司。副社長クラスってことか。しかも、それがあと『三体』もいるとは……恐れ入るねこりゃ。

「その前に一つ、聞きたいんだけど……」

『なんだ我が主よ。あまり時間はないぞ？』

鳥が不思議そうに首をかしげる。

「そもそも、なんで俺が『主』なんだ？」

当然の疑問。なぜ『俺』が『主』なのか？

別にほかのヤツだって良いと思うんだけど……。

『それは、主が私の『存在』を『認識』したからだ』

「存在の、認識……？」

いや、まてまて。お前普通に気配出してただろ？

『主はなにか思い違いをしているが、そもそも我々『精霊』と呼ばれるモノたちは、人種族はもちろん、ほかの種族にも存在を『認識』できるものはいない。ましてや我のような最上級のモノになれば、まず無理なこと。なかにはエルフや妖精種といったものなかで、感受性の高いものが我らの『存在』を『認識』するが、それも本当に微々たるもの。主のように、『存在』を『完全に認識』するなど、あり得んことなのだ』

………ん？ あり得ない……だつて!？

「じゃあ、俺はなんで『認識』できるんだよ!？」

『それは、主の『魔力』が『魔術』といったものに使用されるものとはだいぶ違うからではないかと思う』

「……『魔術』に使われるモノとは違う『力』ってことか？」

『鳥』の説明に俺は質問で返す。

じゃあ、なにか俺が持っている『魔力』は、『魔術』には使えないってことか。

『そう。主が持っている『魔力』は、我々『精霊』の持つ『力』

にすごく似ておる。むしろ同じと言っても過言ではなからう。そのため、申し上げにくいのだが、主は人種族などが扱う『魔術』は使えんと思う。いやむしろ『魔術』自体が主の『力』に耐えきれず、消滅するだけだ』

俺は『鳥』の説明に呆然とする。

そりゃあ、こんな魔法のある世界に生まれ変わってきたんだから、使ってみたかつたんだよ魔法を……。

でも、それが使えないなんて……あんまりだ!!

『これは推測だが、たぶん主がこの世界とは『異なる世界』から来たのが原因ではないかと……』

「……っ!?!」

こいつ、今なんて言った!?

「………なんで知ってる……」

『我はこれでもこの世界の一端を守護する者。知っていて当然のことだ』

『鳥』はそう言つとふんと威張ってみせた。

恐るべし『鳥』!

『問答は終わりか? 終わりであるならば、早く決めて頂きたいことがあるのだが……』

『鳥』が、少し焦りながら話す。

時間がないのか、すこし急かしているようにも思える

「そう言えば、さつきも時間がないとか言ってたけど、なにを急いでいるんだ？」

『名だ』

「葉？」

葉っぱ？

『違う。我の名前だ。早く私の『名』を決めんと大変なことになる』

そう言う『鳥』は、本当に焦っているようだ。

「なんでお前の『名前』を決めないと、大変なことになるんだ？」

たかが『名前』なんて・・・

『『名をつける』ということは、我に『名を与える』ということだ。『名』を決めることによって、初めて『契約』は完成する。もし、『名を与える』のが遅いと、『契約』は失効となり、主の身体は、吸収した我が『炎』によって、その身を内側から焼かれて死ぬことになる』

「焼かれて死ぬっ！？　なんだその物騒な『契約』は！？　第一、そっちが勝手に『契約』してきたんだろっか！？」

内側からミディアム！　なんてシャレにもならねえ！！

『『契約』自体についてのちほど詳しく話すとして、『契約』することについてはこの世界の決まりだ。誰も覆すことはできん』

そんなの押しかけセールスみたいなもんじゃないかよ！

「さあ、我が主よ！ 我に『名』を！！」

俺の心の叫びもなんのその。『名』を迫ってくる『鳥』

・・・ええいつ！ こうなったら、前の世界にいたとき、ちらつと歴史の教科書でみたアレにしよう！

・・・なんか雰囲気とかも似てるし。

「分かった！ お前の『名』は」

俺は半分ヤケクソ気味になりながら叫んだ。

「『朱雀』！！」

「『南方炎帝 朱雀』だ！！」

『承知！！』

『鳥』・・・『朱雀』は、歓喜の声とともに、その巨体を、羽を広げる。

『我が名は『朱雀』。我が主より賜いし『名』を持って、主を守護する者とならん！』

その声とともに、朱雀の姿が輝きだし、その眩しさに手をかざす。

そして、朱雀の姿がピカッとひとときわ輝くと同時に、
俺の意識もブラックアウトしたのだった。

十回 目の『名』は・・・(後書き)

分かる人には分かりやすいほどの名前だなあ

十・五回目 寝顔と決意（前書き）

すみません。

遅くなつて本当にすみません。

十・五回目 寝顔と決意

（バイアス side）

「……………」

小さな机と、壁に貼った大きな大陸地図。そして、部屋のあちこちに捨てられるように散らばっている本の数々。

そんな統一性のない部屋で、この部屋の主が静かに寝息をたてている。

部屋の窓近くのベットに寝ている我が息子　もちろんライハのことだ　は、先程まで時折痛みにくらえるような、苦しそうな表情をしていたが、今はそれも落ちつき、静かに寝ていた。

「……………成功、したか……………」

『ああ、無事に契約は成功した。だから、おぬしも安心せい』

ふと自分のつぶやきに返事が返ってくる。

その声の主を視認することはできないが、『感じる』ことはできる。その感覚も微々たるものではあるのだが……………。

『なに、我が主と契約したお陰でおぬしにも僅かではあるが、心配を感じる事ができるようにしてある。もともと、我の声を『聴く』だけの素質は持っているようであったからのお』

「当たり前えだ。俺が何年お前たち『精霊』と契約を交わそうと躍起になっていたと思つてやがる。こちとら伊達に日々研究をしているわけじゃねえんだよ」

自分の頭の中に直接響いてくる声に、独り言のように話を返す。

『我が主の親とはいえ、おぬしもなかなかのものよのお。我々『精霊』の声が聞けるものなど』『エルフ』や『ドワーフ』の奴等でもそつはおるまい。それがたかだか『人種族』のいち魔術師などに聞こえているのだから、『エルフ』どもも形無しだのお』

そつ言いながら、声の主はカラカラと笑う。

確かに、『エルフ』や『ドワーフ』と言ったもともとの魔力が高い奴等なら聞こえる可能性もあるが、俺みたいないな『人種族』が聞こえるなんて、奴等が知ったら卒倒モノだろう。

まあ、俺だつてもともと聞こえたわけではないのだが……。

そもそも俺がこうして『精霊』の声が聞こえるようになったのは、『精霊』とコンタクトを取る研究をしていたからだ。

言うならば、『精霊との契約』。

そして、『契約した精霊の召喚』。

宮廷魔術師を辞めてまで、俺が求めていた『術』^{モノ}。

それを俺の息子は ライハは僅か6歳になるうかという年齢で手に入れた。

その事実がひどく悔しく、また羨ましくもある。

だから、俺は決めた。

ライハに、自分が今まで研究してきた『精霊の召喚』についての全てを教え込もう、と。

研究自体は、まだ未完成だ。たぶん俺の力が一生完成することはできないだろう。

でも、精霊と契約できたライハなら もしかしたら、完成さ

せることができるのではないだろうか？

もちろん推測でしかない。だが、可能性は俺なんかよりもずっと高いはずだ。

だから、こいつに ライハに託そうと思う。

俺の『召喚術』
すべてを

「……………うん……………」

ベットで寝ているライハが小さく身じろぎする。
布団が少しずれたので、掛けなおしてやる。

「頼むぜ……………ライハ。おめえは俺の自慢の息子だからよ」

普段、ライハには絶対に言わない言葉。

『自慢の息子』

だからこそ、大丈夫だろう。ライハはなんてったって『自慢の息子』だ。俺が完成できなかった『召喚術』を完成させるだろう。

そつとライハの髪をなでる。

その手に、自分の願いを込めて……………。

『おめしは本当に、親だのお……………』

俺は『精霊』の声を聞きながら、いつまでも……………いつまでも……………
ライハの髪を撫でていた。

十・五回目 寝顔と決意（後書き）

親父、なんかしんみりだよ・・・。

十一回 冒 月日は早々と・・・(前書き)

とりあえず、進行中。

十一回目 月日は早々と・・・

見渡す限り鬱葱と茂る木々。

辺り一面、木々と草花しかない。

生えている木々、どれも天に向かってこれでもかと言わんばかりに枝を伸ばしている。

そんな山あいの中、俺は、粛々とただ走っていた。

ザツザツと木々の間を駆け抜ける音。

そこへ、不意打ちがごとく、

ドンッー！

ドンッドドンッー！

と、飛来する俺の頭ほどの炎の塊。

しかし、俺に直撃するであろうその塊は、ほんの少し走るスピードを上げたことよって、そのことごとくが地面や周りの木々へと直撃する。

「・・・火球の精度をあげてきたな」

俺がそうつぶやくと同時に、先程とは比べ物にならない速さで火球が迫ってくる。

チツと内心その容赦のなさに舌打ちをすると、手に持っていた棒で火球をはじき返す。

しかし、相手もさることながら、次々と無慈悲と思えるほどに火球を繰り出してくる。

その数、なんと20以上。

「……おいおい、さすがにこれはヤバイだろ……」

思わず足を止め、迎撃の態勢を取る。下手に動き回ったらかえって危険だ。

「しかし、全方位からの一斉射撃。見事に囲んでくれたもんだ」
背中に嫌な汗が流れる。

一応言っとくが、これ、修練だよな？ この数はさすがに死ぬよ？

『主よ、鬼ごっこはお終いじゃ』

どう対処しようものか考えていると、どこからか声が聞こえてきた。

気配を感じ、上を見上げる。

そこに紅い鳥　朱雀がいた。

「朱雀、これはちょっとやりすぎじゃないかい？　いくら俺でも避け切れるか微妙なんだが……」

『大丈夫じゃ、我が主』

すると朱雀はスツと片翼を上げる。

『手加減は致す。なに、もし無理ならば、骨は拾ってやるでお
「いや、拾うまでするな！ むしろ骨にするな！」』

朱雀の死刑宣告に、片手に持った棒を振り回しながら全力で突っ
込みを入れる。

『ほおほお、我が主はまだまだ元気があるようじゃのお・・・ど
れ・・・』

俺の周りを囲んでいた火球の数が増える。
・・・しかも、大きさも倍になって。

「ちょ、朱雀、やりす
『なに、死ぬ気でやれば死なんよ』」

朱雀が、上げていた翼をスツと下ろす。

次の瞬間、

「・・・いつか、焼き鳥にしてやるうううう！！！！」

俺の絶叫と共に、量と質を倍にした火球が、一斉に俺目掛けて襲
ってきたのだった。

季節は、深緑豊かな夏の初め。

俺 ライハ・バーミアス、13歳のいつもの日常のひとつ
であった。

十一回目 月日は早々と・・・（後書き）

はい！来ました、いきなりの年齢すつとび！

さくさくと物語を進めていききたいなあ！

十二回目(前書き)

進行速度若干早め

十二回目

「……まったく少しは手加減つてものを考えてほしいもんだよ……」

日課の鍛錬を終えて、修行場の森から家へと戻る帰り道。

俺は、今日の鍛錬に対して少しボヤキながら、うつそうと木々が茂る森の中を家へ向かって歩いていった。

『なに、今の主ならアノ位がちょうどよいと考えて火球を放つたのじゃ。まあ、2・3発は当たっていたがお。それも主を思えばのことじゃ』

そう言つて、カラカラと笑う赤い鳥　朱雀。ちなみに朱雀は俺の右肩にちょこんとまっている。

……いつそ、今、焼き鳥にしてやるつか、このチビ鳥……。

邪気のない顔で笑っている朱雀を見て、ほんのりと　いや、かなり真面目に殺意を覚えるね、うん。

『……主、気のせいではあると思うが、今、ものすごく物騒なことを考えはしんだかのお?』

「いや、気のせいだよ！　キ・ノ・セ・イ・ッ！　ナニライツテルノデスカ、スザクサンハ！」

『なにやら、言葉がカタコトになっているのだが……』

しらーと白い目で俺を見てくる朱雀。なにを言ってるんだ、この

鳥は！

そんなこと・・・ものすごく思ったとも！

そんな俺の様子を見て、朱雀は、はぁーとため息をつきながら、
まあ、いいがのと諦めたように呟いた。

朱雀とそんないつものやり取りを家へと歩く。ふいに気配が生じた。

「お疲れさまでした」

言葉とともに、いつのまにか目の前に一人の若い男が立っていたが、これもいつもの風景。

「うん、疲れたよ」

そういって、これもまたいつの間にか差し出されていた手ぬぐいを受け取る。あと、お礼もかかさずに返す。

「いつもありがとう、白虎^{ハヤヒコ}」

「いえ。これが私の務めなので」

俺の言葉に愛想なく答える白虎。

うーん、まだまだ固いなあ。

そう思った俺は白虎を見る。

ちかくにある町の人たちが着るような簡易な服を着て、その特徴とも言える雪のような真っ白な短髪を逆立たせ、生真面目な表情で

こちらを見る、見た目20代半ば位の青年。

その名を『西方白帝 白虎』。

『朱雀』と同じ、四方が一柱にして俺と『契約』したヤツだ。

契約したときのことは、いつか詳しく話すとして、何が固いかと
いっと……

「では、失礼ながら、背中 of 汗を拭かせていただきます。いえ、
背中と言わず全てでも構いません」

……これだよ。

十二回目(後書き)

新キャラ登場!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7046u/>

召喚師冒険記

2011年10月26日09時58分発行